

# のび太戦記 AMAZING HEROS

じゃすていすり〜ぐ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

家に自称猫型ロボットがいる事と、様々なところを冒険している事を除けばごく普通の小学生『野比のび太』は4年生の時に放射能で変異した蜘蛛に噛まれ、スーパーパワーを手に入れた。

始めはそのスーパーパワーでいい気になっていたが、ある事件により己の慢心故に母親を死なせてしまう。後悔の念に駆られたのび太は小さい頃、祖母が言っていた『大いなる力には大いなる責任が伴う』という言葉を思い出し、正義のヒーロー『スパイダーマン』としてその力を多くの人々を守る為に使うことを決意する。

それから2年後・・・、スパイダーマンの活動をしていたのび太はひよんな事からあ

る事件に巻き込まれる。

その事件がのび太の住む町の・・・いや、全世界の命運を握る大きな戦いの序章となるとは知らずに・・・。

これは、ドラえもとスパイダーマン（他色々）のクロスオーバー二次小説です。

この小説には以下の注意がございます。

- ・多重クロスあり
- ・東映版のネタ、敵組織が出てくる。
- ・キャラ崩壊あり（特にのび太が）
- ・設定改変あり

これらがダメだというお方はすぐさまブラウザバックをしてください。

# 目次

序章『スパイダーマン誕生編』

プロローグ『胎動く脅威の蜘蛛男誕生

く』その一 ————— 1

プロローグ『胎動く脅威の蜘蛛男誕生

く』その二 ————— 10

第一章『ビギンズ―戦いの始まり―』

第1話「それは不思議な出会い」

23

第二話『襲撃！マシーンベム！』

36

第三話「鋼鉄の男、来日」 ————— 47

第四話「スパイデイVS黒き魔法少女

！

第5話「出動！アイアンマン！」

67

第6話『アイアンマンVSエレクトロ』

————— 82

第7話『大波乱の科学コンテスト』

93

59

## 序章『スパイダーマン誕生編』

### プロローグ『胎動～脅威の蜘蛛男誕生～』その一

やあ、始めまして。かな？僕の名前は野比のび太。小学6年生だ。

ちよつと普通とは言いがたいけどね。どこが普通じゃないかって？まあ、それを知るにはまず僕の身の上話から語らなきゃならない。

とは言っても、女の子に囲まれてるだとか、スポーツ選手を目指していた・・・とか、そんな大層なものじゃない。友達に真ん丸い自称猫型ロボットが居たり、そいつや他の皆と他の国や宇宙・・・果てはパラレルワールドとかを冒険したりしてるけどさ。

でも・・・この物語が、何処にでも居る平凡な少年の幸福な物語だと言うヤツが居たら・・・、そいつは大嘘つきだ。

それは僕が四年生のある日の放課後だった。その時、僕たちはある日くつきの部屋の掃除をしていた。・・・まあ、過去に生徒が自殺した部屋だのなんだのと学校の怪談でよくあるアレさ。

何でも、その部屋で当時の校長が学校の学力向上の為に理科の授業に放射能制御の実

験をしようとして何をトチ狂ったのかその装置を持ってきたそうなんだ。結果は、大失敗。

それが暴走を起こし、生徒が何人か死亡。．．．んでもってその放射能云々の実験は取りやめとなったらしい。自分で言ってるんだけど何それ怖い。

まあ、今じゃあ放射能とかも綺麗に除去されて普通に立ち入り出来、僕らもこうやって掃除していた。

「痛っ．．．!？」

それは僕が雑巾がけをしてる最中だったんだ。いきなり、僕の右手に変な色をした蜘蛛が降りてきて嘸みついた。そして、次の瞬間に眩暈が。あの時はホント参ったよ。目の前がぐにやぐにやになるんだもん。そして、そのまま僕の意識はブラックアウトしたんだ。

次に目を覚ましたのは保健室の天井とガールフレンドのしずかちゃんの今にも泣き出しそうな顔だった。聞いてみたところ、白目を剥き口から泡を吹いて今にも死にそうだったらしい。心配かけてゴメンと謝りながら眼鏡をかけようとして、異変に気づいた。

．．．そう、眼鏡をかけた瞬間、視界がぼやけたのだ。度が合わなくなっただのかな？  
と思ひ、はずすと今度は視界が鮮明に。これは驚き！僕の視力が上がっていたのだ。ど

うしたの?と聞いてくるしずかちゃんに何でもないよと答え。何事も無く保健室を立ち去った。

特異な変化は視力以外にもあった。

それは、蜘蛛に噛まれてから翌日の事だった。僕の悪友の一人であるジャイアンに『約束の時間までに空き地に来い!じゃないとギツタギタにしてやる』と言われ、僕は大きく急ぎで空き地に来た。ギリギリでセーフだ!だけどそこで僕を待っていたのは理不尽な出来事。

「のび太!約束の時間までに来てって言ったよな?お仕置きだ!」

「ええ!?ちよつと待ってよ!ちゃんとギリギリだけど間に合ってるじゃんか!」

「いいや、1秒遅かったからアウトだ!喰らえのび太!!!」

1秒遅かったからアウトって理不尽すぎない?僕の言い分を無慈悲に跳ね除けジャイアンは僕に拳を振るう。ああ、もうダメだ!そう思ったときだ。

(・・・あれ?)

突如フシギな感覚が襲ってきたんだ。なんと言うか、首筋がチクチクするようなそんな感じ。そして、ジャイアンの動きもスローモーションみたいに遅くなっていた。

「ってあれ?」

「の、のび太がジャイアンのパンチをかわした!」

気がついたら、いつの間にかジャイアンのパンチを回避していた。ジャイアンは諦めず僕にパンチを繰り出すも、ことごとく僕に回避されていた。

「もういいだろ？とりあえずやめにしない？」

「ふざけんな！まだ一発も殴ってねえぞ！」

まあ分かつてたけどね。ぶっちゃけ痛いのは嫌なので・・・、

「逃げるツ！じゃそういうことでー！」

「あつ！待てのび太ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！！！！！」

逃げるが勝ち！そのまま僕は逃げ出した。無論ジャイアン達も追いかけてくる。が、ふとここでも違和感に気づいた。

(・・・僕ってこんなに足速かったっけ？)

自分で言うのもなんだけど人一倍足の遅い僕は普段ならすぐに追いつかれてしまうのだが、今回は違った。何故かジャイアンが追いついてこない。と言うか引き離しているのだ。

(兎に角、こつちのスタミナがいつ切れるか分からないから・・・何処か隠れられる場所を探さないと・・・)

そう思い、角に差し掛かる。ふと、右手の方に大きな木が見えた。僕は反射的にジャンプして木に張り付いたのだ。そしてそのまま木に登り、見えない位置に移動。



(え!? えええええええええええええええええ!!?)

自分の事ながらびつくりした。いつもならこういう芸当は出来ないはずなのに。と言うか、木に張り付く自体が無理だよな。．．．一体何がどうなってるんだ!? そんな内心びつくり仰天している僕とは裏腹に、ジャイアンたちはキョロキョロと辺りを見回し、何処かへと行った。

「とりあえず、やりすぎしたか。．．．さつきの変な感覚といい、足の速さといい一体どうなってるんだろう。ドラえもんに聞いた方が早いかな?」

そう眩きながら、木から下りる。とりあえず、家に帰ってドラえもんにも：そう思つて帰路へと着いた。のだが．．．、

「ツ!? また．．．、うわっ!」

「GRRRRRRR．．．ガウツ! ワウツ!」

再び先ほどの感覚が襲い掛かり、振り向けば、大柄な野良犬が此方に飛び掛つてきていた。だが、気づくの遅すぎた為か回避が出来ず、その野良犬に押さえつけられてしまふ。

「こ、この．．．離れろよ!!!」

「キャイン!!!」

苦し紛れに放つた右ストレートが野良犬の顔面にクリーンヒット。そして、そのまま

トラックにはねられたかのように数メートル飛ばされ、地面に叩きつけられて気絶した。突然の出来事に僕は戸惑うばかりだ。

「ど、ドラえもんと言わなくちゃ・・・」

とりあえずこの事をドラえもんに言う為には僕は足早に家へと戻っていった。

——でもって僕の家。

「ドラえもん！大変だよ!!」

「のび太君、どうしたの!?またジャイアンにいじめられた?」

いつもの如くお決まりのセリフを言う。まあ、分かってはいたが予想通りの反応だ。

「ち、違うよ。実はね・・・」

そして、僕はドラえもんこれまでの事を話し始めた。

実験室跡の部屋で掃除をしていたら蜘蛛に噛まれた事。

それで死に掛け、気がついたら視力が回復していた事。

危険が襲ってきた瞬間に起こる妙な感覚や脚力、腕力など身体能力の異常強化、木などのモノに張り付くと言った体の異変のこと。

「とまあ、こんな感じかな? 一体何がどうなってるのやら・・・」

「ふうん。・・・にわかには信じがたいけど・・・、実際見せられたら信じざるを得ないなあ・・・」

ドラえもんは洗いざらい話し、頭を抱える。最初、ドラえもんはこのことについて信じていなかったが、僕が実際に壁に張り付いたり、眼鏡をはずして視力検査を試みる等実演を試みたらアツサリ信じた。一体何がどうなってるのか？頭を捻っていると、下から声が聞こえてくる。ママだ。

「のびちゃん、ドラちゃん。御飯よ」

「はい。分かったよママ。．．．あ」

この時僕は眼鏡をはずしていた為、眼鏡をかけて下に下りようとした時だ。うっかり、手元をすべらせ眼鏡を落としてしまった。

「あちゃー．．．これは届きそうにないぞ」

これは棒とかを使わないと取れそうに無いなあ．．．。そう思い、ドラえもんは何か道具を出して。と言おうとした次の瞬間だった。

TWIP!

「え？な、何だ？手から何か変なものが．．．」

変な音と共に右手から何かが出た瞬間には、手に眼鏡がしっかりと握られていた。ふと、眼鏡と右手首を繋ぐかのように細い糸がのびていたのが分かった。．．．つまり、手から糸が飛び出してきて眼鏡を取ったと言うわけだ。

「まるで、クモみたいだな．．．。ん？クモ」

まさか、今までの僕の体の異変って……あのクモに噛まれた所為で起こったのか？

—閑話休題

「ふーむ……、色々考えたけれど結論は一つしかないな」

夕食が終わった後、自室で今までの事（勿論、僕の体の事だ）について話していた。

「これは僕の仮説なんだけど……、その蜘蛛……まあ随分昔だろうから先祖がその部屋に居て、放射能を浴びて突然変異を起こしていた。のび太君を噛んだその蜘蛛もその血を受け継いでいた……んだと思う」

「となると、そいつの『毒』が僕の血球に影響を与えて僕の遺伝子情報を書き換えて……僕は蜘蛛の力を持つ超人になったって事？」

僕の問いにドラえもんは頷く。

「そういう事だ。現に君の能力とかを考えるとそれが一番あてはまるんだよ。しっかし、この力は凄まじいものだよのび太君。この能力は下手をすれば他の人に大怪我を負わせかねない」

確かにありえるかもしれない。例えば僕がカツとなつてジャイアンを本気で殴つてしまえば良くて大怪我、悪くて殺してしまう危険性だつてあるのだ。そんな僕の心情を察してか、ドラえもんは僕にある提案をした。

「そうならない為に、特訓しよう。君の力で誰かが傷つかないように。力を隠して普通に生活出来るように」

こうして僕は『能力』をコントロールする為の特訓を始めた。それがこれから始まる物語の始まりだと知らずに・・・。

T o b e c o u n t e n u d e . . .

## プロローグ 『胎動く脅威の蜘蛛男誕生く』 その二

僕がドラえもんと一緒にこの能力をコントロールできるように練習が始めて3ヶ月がたった。部屋をクモの巣だらけにしたり壁紙を破いて張り替えたりと色々あったけど、努力の成果もあつてかその能力をコントロールに成功。野球をはじめサッカー、テニス・・・何でもござれなスポーツ万能な皆のアイドル的存在になったんだ。

良い気分だった。ドジで間抜けな僕が皆から尊敬される人間になったんだからね。だけど、その時、僕は増長していたのかもしれない。僕があの時あしていれば・・・あんな事にはならなかったんだ。

それはある日の午後だった。僕はサッカーの助っ人としてグラウンドに呼ばれていた。結果は僕達のチームの勝利だったよ。危険を察知した時に発動する感覚・・・名づけてスパイダー感覚で危険を察知し、アクロバティックな動きでチームを勝利に導いたんだ。

つと、本題に入ろう。その帰り道、近くの店で強盗が起こったんだ。その強盗と僕は擦れ違い、商店街へ続く道へと入っていった。

「おい！誰かそいつを捕まえてくれ！」

店員であろう男が強盗を息を切らしながら追いかけていた。が、僕は手伝わなかった。サツカーで疲れていたし犯人は銃を持っていたからだ。まあ、僕の場合はスパイダー感覚があるから大丈夫だけど・・・そういうのは警察の仕事だ。僕じゃない。当時の僕はそう思っていたんだ。

そして、僕は家に帰った。

「ただいまー」

「お帰りのび太君」

家に帰った僕を待っていたのはドラえもんだった。いつもなら晩御飯を作っているママがいない。

「あれ？ママは」

「ママなら夕飯の買出しに行ったよ。・・・にしても遅いなあ」

なんだろう・・・嫌な予感がする・・・。いいや、大丈夫だ。ママはすぐに戻ってくるさ。そう自分に言い聞かせてドラえもんと言った。

「多分、近所の人と話してるんじゃないかな？とりあえずテレビでも見て待つてようよ」  
「それもそうだね」

テレビをつける。いつもなら、僕がよく見るアニメがあるはずだけど今回だけは違った。ニュース速報のようだ。

『すすきヶ原商店街にて銃を持った犯人と駆けつけた警察による銃撃戦が起きました』  
「大量殺人だつて!?!しかも、この商店街はママが買い物に行くつて言つてた商店街じゃないか!」

ドラえもんの言葉に、僕は心臓が止まりそうになつた。そういえば、あの強盗は銃を持つていた。そして、あの商店街に続く道へと行つたんだつた!巻き込まれていないでくれ!そう神に祈る。

『その際に、警官2名が負傷・・・居合わせた買い物客の野比玉子さんが死亡しました』  
「そ・・・そんな・・・ママが・・・」

「だ、大丈夫さ!多分、同姓同名の別人だよ!そうに決まつてる!」

テレビ画面を見つめ愕然とするドラえもんを僕は、なだめた。他人の空似であつてくれ!そうであつてくれとひたすら胸中で願う。

TRRRRRRRRRRRRRR・・・。

その時電話がなつた。出ようとしたドラえもんに僕が出ると言うつと、電話へ向かい受話器を取る。

『・・・のび太か?』

「パパ?どうしたの?」

電話の主はパパだつた。しかも何故か声音が重苦しい。



『いいか、のび太落ち着いてよく聞くんた。さつき、警察から電話があつたんだが…玉子が強盗との銃撃戦に巻き込まれ…死んだそうだ』

パパの非情な宣告に僕は受話器を取り落としてし呆然とした。そして罪悪感で埋め尽くされる。あの時…あの強盗を捕まえていれば…あの強盗を…。

「ツッ！」

「のび太君!!！」

次の瞬間、僕は弾かれるように家を飛び出していた。…そう、あの強盗を捕まえる為だ。こんな事をして、ママは帰ってこないって事は分かつてる。…だけれど！

「アイツは…何処だ?！」

スベアポケットから拝借したタケコプターで空を飛びスパイダー感覚を最大限にして『ヤツ』を探す。すると…居た。警察に包囲されているパトカーの中だ!あの銃撃戦の後、車で逃げこの家屋に逃げ込んだようだ。どうやら空家のように、中には『ヤツ』しかない。

警察に気づかれないように裏側にあつた2階の窓から中に入る。そして、台所で冷蔵庫の中をあさっていた『ヤツ』を見つけた。

「おーい！」

「わっ?!…何だガキか。ガキはおうちに帰りな。おじさんはこわーいオモチャを持ってるんだからよ」

すぐさま、躍り出て『ヤツ』の前に出る。最初は驚いたが、僕が子供と知るやバカにした様子で銃を突きつけ笑う。…だが、その笑いもここまでだ!

ダッ!

床を思い切り蹴り、駆け出す。丸腰で向かってきた僕を見て、バカが。と言いたげに『ヤツ』は銃の引き金を引いた。

BLAM!

マズルフラツシユと共に弾丸が僕の肩間に向かって放たれる。だが、僕からしてみればそんなものは止まって見える。頭を横に逸らし、銃弾を避けた。案の定『ヤツ』は先ほどまでの笑みを浮かべた表情を消し、ギョツとした感じで僕を見ていた。

BLAM!BLAM!BLAM!

続けて発砲。だが、無駄だ。僕にはかすりもしない。そのまま拳を振り上げ『ヤツ』の顔面にたたきつけた。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアア!?鼻が!?鼻がアアアアアアアア!!!」

グシヤリ!と嫌な音と共に、『ヤツ』は鼻から血を流し倒れた。僕は、そのままヤツに近づくと胸倉を掴み上げる。

「あ……が……!?ば、化け物……!?」

「化け物はお前の方だろう。……人の命を奪ってにおいて、この人殺しめ……。このまま警察に……」

「ま、待ってくれ!金なら半分……いや!全部くれてやるからさ!だから、頼む!見逃してくれ!助けてくれよお!」

「……助けて、くれだど?」

ママを殺しておいて身勝手な命乞いに僕のナニカが切れた。そして、そのまま拳を再び顔面に叩き込む。

「ぐげッ!」

「僕の……僕の大切な人を殺しておいて……多くの人を傷つけて……それで助けてくれ?見逃してくれだど?……ふざけるな!!」

「アガッ!?ギヤベッ!?グギイ!?やめ……ガフッ!?たすけ……」

怒りで我を忘れた僕は倒れた『ヤツ』に馬乗りになり、一心不乱に拳を叩きつける。

「止める?助ける?お前はどうかんだよ!お前は止めたのか?僕を止められる理由はあるのかよ?言ってみろよ?僕に殺される理由なんかないって言ってみろ!!」

僕の問いに『ヤツ』は答えない。答えられないのだ。僕の度重なる拳撃で顔面が原型がとどめないレベルに腫れ上がり、目も虚ろだった。後、何撃か食らわせれば死ぬだろう

う。だが、僕はそんなのどうでも良かった。ママを殺した『ヤツ』の息の根を一刻も早く止めたかった。その時だ。

「止めるんだ！のび太君！」

声と共に、僕の拳が誰かに止められる。声のほうを見てみると、ドラえもんだ。その手には僕の手が握つてある。

「放せよ！何でとめるんだ!? コイツがママを・・・」

「これ以上やると、死んじやうぞ！」

「だからなんだ!? こんなヤツ、死んで当然だろ!? だから殺すんだ！ジャマを・・・」

「馬鹿野郎！」

ドラえものの言葉に思わずビクつとなる。

「こんなヤツを殺してどうなる!? ママが喜ぶと思うか!? 帰ってくると思うか!? いい加減目を覚ませ！」

そうだ・・・。確かにそうだ・・・、コイツを殺した所でママが戻る訳でもない。喜びもしないだろう。・・・僕が人殺しになつてしまっただけだ。そんな事はママは望みもしない。

「あ・・・ああ・・・うあああああ・・・うあああああああ・・・ああああ!!!」

冷静になると同時に、ママを失った悲しみが一気に襲い掛かってきた。それと同時に、涙が滝のように溢れる。そんな僕は、ドラえもんは優しく受け止めた。

「・・・帰ろう、家に」

そうして、僕たちは空家を出た。警察が踏み込んだのは、それから数十秒後の事だった。誰も、僕たちが居た事は知らないし、僕が何をしたのかはドラえもん以外知らない。この人殺し？ああ、飛んだ自己紹介だ。ママは僕が殺したようなものさ。そして後一人も殺しかけた。ドラえもんが止めなかつたら確実に殺していた。

帰る際、僕はある出来事を思い出していた。

それは、僕が小さかった時の思い出。おばあちゃんがいたときの記憶だ。

「のびちゃんは大人数になつたら何になりたいんだい？」

「僕は、ヒーローになりたい！それで、悪いヤツラをやっつけたいのー！」

おばあちゃんの問いに小さかった僕はそう答えた。そうか、と優しい笑みを浮かべながらおばあちゃんは言う。

「ヒーローを目指すのかい？良い心がけだけど、これだけは覚えておいてね、のびちゃん」

「なあに？」

「大いなる力には、大いなる責任が伴う。・・・今はまだ分からないだろうけど、いつか

きつと分かる日が来るよ」

そのおばあちゃんの言葉を思い出すと共に、僕ははつとした。・・・力と責任、そうだ。僕は忘れてた。

「大いなる力には大いなる責任が伴う・・・か」

「のび太君？」

「・・・独り言さ。なんでもないよ」

ふと口にした独り言に怪訝な表情を見せるドラえもんはそう言つて家に帰つた。

あの後、ママのお通夜に葬式といろいろあつた。ジャイアンやスネ夫、しずかちゃんを初めとする学校の友達も来てくれて、励ましてくれた。・・・ただ、ジャイアンの『例の歌』だけは勘弁願ひたかつたが。

少しずつだけど、僕も立ち直れるようになった。本音を言うと、まだ胸にぼつかりと空いた穴は塞がっていない。だけれど、いつまでもふさぎ込む訳にもいかないからね。

僕には責任がある。『力』を持つてしまった責任が。

『大いなる力には大いなる責任が伴う』

あの日、おばあちゃんがいった言葉。・・・その言葉の意味を僕はその日を通して理解した。今となつては遅すぎたかもしれないけれど。

生きている人々に対する責任。助けを必要としている人々に対する責任。過去の失

敗を正すチャンスを掴むに値する、死に直面した人々に対する責任。・・・そして死んでしまった人に対する責任が僕にはある。

・・・だからこそ、この力を自分の為じゃなく人々の為に使いたい。それが、死なせてしまったママに対する償いでもあるから・・・。

そして僕はある『活動』を始めたんだ。

―それから二年後・・・。

『こちら、ドラえもん。のび太君、何か可笑しいことはないかい?』

「ああ、特に問題は・・・。いや、あるな・・・向こうだ」

真夜中の町の中、今現在僕は、日課の『活動』中。いつものコースをウェブを使ってスイングしながらパトロールをしているとスパイダー感覚に何かがヒットした。僕は通信を入れてきたドラえもんにもう返すとその感覚がする方に向かう。

あー、ちなみに今の僕の服装は赤と青を強調したスーツを纏い、顔には誰かに顔を見られてもいいようにマスクを被っている。

僕がこの『活動』を始めたいと言った時、ドラえもんには反対された。ママが死んだのは君の責任じゃない!いくら力を持ってても君では危険すぎる!と。だけど、僕の真剣な思いに遂に折れ、僕の行動を容認するだけでなく、協力も買って出てくれた。

それがこのスーツだ。未来の超技術で作られたこの赤と青で強調されたこれは、

ちよつとやそつとのことじゃ破れない。いやあ、未来の技術つてすごいね。

つと、話をして居る場合じゃないな。スパイダー感覚が強く反応する方向を頼りに進んでみると、居た。路地裏だ！一人の気弱そうな少女を複数のチンピラ達が囲んでいる所を見るとカツアゲらしい。

「どんぴしゃりだ。それじゃいつもの如くちやちやつと終わらせてくる」

『了解、怪我だけはするなよ』

分かつてるよ。とドラえもんにそう言つて通信を切る。さあ、お仕事の始まりだ。僕は、一番端つこに居たチンピラの背後に下りると、彼の肩をチョンチョンとつつく。振り返つた瞬間に顎めがけ右フック！

「AUG!」

クリーンヒット。そいつは脳震盪を起こし、そのままノックアウトした。彼の叫び声に気づいたチンピラ達がいつせいに振り返る。

「やあやあ、ちよつと失礼。ジャマしてゴメンね。見た所、その人をカツアゲしてるっばいからさ。いけないよ、こんなか弱い女の子をよつてたかつて」

「何だテメエは！」

殴りかかろうとしてきたチンピラの拳をかわし背中めがけて回し蹴り。

「UH!」



「TWIP! TWIP! そのまま壁に叩きつけられた所をウェブを発射して蜘蛛の巣まみれにしてやる。」

「やれやれ暴力はいけないよ、暴力反対。あ、でも僕は違うよ。仕掛けてきたのは君たちだし……」

「この野郎! よくも……Oof!?!」

「これは正当防衛ってヤツさ」

近くに落ちてあつた鉄パイプを拾い殴りかかつてきたチンピラの顔面に、右ストレートをぶちかます。

「さて、どうする? ここいらで止めにしておく?」

「ひ、ひい! ず、ずらかれー!」

「はい忘れ物。あと、カツアゲなんて二度とやっちゃダメだよー!」

手下をことごとく倒され、恐れをなしたリーダーらしきチンピラは泡を食って逃げ出した。先ほどノックアウトさせたチンピラを投げて返す。ぎゃあ! と押しつぶされてずっこけるチンピラ達は見てて滑稽だった。

「あ、あの助けてくれてありがとうがとうございました」

「いいっていいって。当然の事さ、それよりも夜道帰るときは気をつけたほうがいいよ。ああいうの多いからさ」

ふと、先ほどまでカツアゲされていた少女が声をかける。僕は笑って返すと、ウェブを使いこの場から去ろうとした。

「あの、貴方は一体……」

原作：ドラえもん　マーベルコミックシリーズ　Etc……

「僕が誰かって？」

つと、読者の皆にも僕のもう一つの名前を聞かせてなかったね。『もう、分かっているよ』何てことはいわないでくれよ？僕のもう一つの名前……それは……、

作：ハイド

「I, m Spider-Man」

のび太戦記　AMAZING HEROES

とまあ、これが僕の始まりの物語さ。ちよつと長かったかな？

プロローグ　完。エピソード1に続く。

# 第一章『ビギンズ―戦いの始まり―』

## 第1話「それは不思議な出会い」

―東京都練馬区上空にて。

BOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOM!

爆音と共に闇夜を閃光が照らす。炎を上げ、崩れ落ちる宇宙船らしきものから数多の光が流れ星のように練馬区へと落ちていった。その様子を見ている影が1つ。

そこへ赤いレオタード姿の長く伸ばした黒髪の女性が影の下に飛んできた。

「報告いたします。『例のモノ』を奪う為に乗組員を殲滅しましたが、一人『スクライア族』の子供を取り逃がした挙句、船は自爆。『例のモノ』もこの地域に散らばりました。いかがいたしましたでしょうか？」

女性の報告に、影はそうか……。と答え、続けた。

「スクライア族の小童一人等、おいおい始末すれば良い。もとより我等の目的は『例のモノ』を手にかけることだ。アマゾネスよ」

「はっ」

「お前には地上に落ちた『例のモノ』の回収を命ずる。基地に戻り、ドクター・オクトパ

スからマシーンベムとニンダーを受け取り次第、作戦に取り掛かれ」

「了解しました。必ずや、『例のモノ』……『ジュエルシード』を手にし地球を我等が  
『鉄十字団』の手に」  
アイアンクルセイド

深夜の上空にて、『闇』は人知れず蠢く。

―そして場所は変わり練馬区にある森の何処か。

「はあ……はあ……」

傷ついた体を引きずりながら淡い金髪の少年は森の中を歩く。その足取りは覚束なく、今にも倒れそうだ。

ガッ。

「あうっ……」

途中石に躓き、派手に転ぶ。だが、少年は諦めず起き上がり再び立ち上がった。

「い、行かなくちゃ……。ジュエルシードが奴らの……アイアンクルセイドの手に全て渡る前に……」

息を切らしながら、少年は進むもとうとう体に限界が来たのか木にもたれかかった。

「だ、ダメだ……。一步も動けない……。だ、誰か……」

少年は息も絶え絶えに呟くと同時に眩い光が辺りを覆う。そこには、少年の姿は無く、一匹のイタチのような生き物が残されていた……。



「おはよう二人とも、御飯できてるよ」

先にイスに座りながら僕は二人に返す。二人も後からイスに座った。

「「頂きます」」

そして、箸を手に御飯を食べる。パパが、ん？と味噌汁をすすり、口を開く。

「のび太、この味噌汁美味しいな。腕を上げたなあ」

「そう？」

「うん、確かに美味しいね」

そう言つて美味そうに朝食を食べるパパとドラえもんを見て、少し顔がほころぶ。……ママも、僕らに御飯を作る時はこんな気持ちだったのかな……。おっと、いけないいけない。

「ご馳走様。んじやあ僕は学校に行つてくるね」

センチメンタルな気持ちを追いやるように御飯を急いでかきこむと、僕はすぐさま自分の部屋に行き、着替えを済ませると学校へと向かった。

——んでもつて時間をすつ飛ばし、放課後。

「お？今日の夕刊に乗ってるぜ？俺達のスパイデイの活躍！」

「えーっと、何々？『我等が親愛なる隣人、スパイダーマン。火災現場から生存者を救出！』かあ」

「スネ夫さん、タケシさん。コンビニで立ち読みは止めましょうよ」

学校が終わって、その帰り道。今現在、僕はジャイアン、スネ夫、しずかちゃんの4人と言ういつものメンツでコンビニによっていた。理由は、コンビニにある今日の夕刊を読むからだ。

夕刊には一面に今日のスパイダーマン……つまり僕の活躍が記載されていた。写真写りとかはピンボケでアレだけれど……。

事件や事故は昼夜問わず起こる。まあ、それを解決する為に僕はスパイダーマンとなつて解決するわけだが……。事件が昼に起こる場合は僕は授業を抜け出さなければならぬ。どうやって授業から抜け出しているのかは後でおいおい話そうと思う。

僕がスパイダーマンとしての活動をしてから2年後、口コミやらなんやかんやでスパイダーマンの存在が広まり始め、今では町のヒーローとして支持される存在となつていた。……まあ、快く思わないものも居るけれどね。

「そうだよ。立ち読みをするんなら買ったほうが……」

夕刊を立ち読みするジャイアン、スネ夫を諫めるしずかちゃんに同意した次の瞬間だった。

(助けて……)

頭の中で声が聞こえた。この声……一体何者だ？そんな事を考えていると。

「どうしたの？のび太さん？」

「え？しずかちゃん今の声聞こえてなかった？」

「いいえ、何も？」

「何か聞こえたの？」

「俺は全く聞こえなかったけどなあ」

しずかちゃんに続いて、ジャイアンとスネ夫も答える。・・・じゃあ空耳だったのかな？そう考えていると・・・。

「なのは、何処に行ったのよ？」

「なのはちゃん」

声がしたので、ウィンドウを見ていると外で、学校の後輩であるアリサ・バニングスと月村すずかがキョロキョロと辺りを見回していた。

「アリサちゃん、すずかちゃん。どうかしたのかい？」

「あ、のび太先輩」

「なのはが急にどっかに行っちゃって。それで探してるのよ」

「なのはちゃんか？」

アリサちゃんとすずかちゃんが言うには、学校の帰り道になのはちゃんこと、高町なのは（2人と同じく学校の後輩だ）が急に『不思議な声を聞いた』と言って、何処かへ



走って行ってしまったと言うのだ。

「……やはりあの声は空耳じゃなかったのか。でもなんで僕やなのはちゃんだけに聞こえたんだろう？……まあ、なんにせよ。」

「なのはちゃんを探そう。とりあえずなのはちゃんが行きそうな場所を……」あ、なのはちゃん！」ってあらあ？」

なのはちゃんを探そうとしたその矢先、すずかちやんの声に振り向くと、なのはちゃんがフェレットらしき生き物を抱えてやってきていた。

「もう、なのははつたら。いきなり走って行ってびっくりしたじゃない！先輩達と一緒に探す所だったのよ!？」

「あう……ごめんなさい」

アリスちゃんの言葉に、なのははシュンとした表情で僕達に謝る。

「いいのよ、気にしないで。それよりこのフェレット……怪我してるみたい」

「すずかちやんの言うとおり、そのフェレットはどこどころ傷だらけ……鳥に襲われたか？兎に角、急いで治療をしないと……」

「それならよ。ドラえもんのお医者さんカバンで治せばいいんじゃないか？」

「あれ、動物に効かないんじゃないか？」

「なら、動物病院に連れて行けばいいんじゃないかな？確かこの近くにあったし」

すずかちゃんの提案を受け入れ。僕たちはフェレットを動物病院に運ぶ事にしたのだった。

—そして、夜となり。のび太宅。

「で、動物病院で診てもらった結果、命に別状はなかったって事さ」

「ふーん。でもさ、そのフェレットは誰が面倒見るのかつてのは話したの?」

僕の部屋で、スパイダーマンスーツに着替えながら、僕は放課後の帰り道起こったことをドラえもんに話していた。

「いいや。明日話し合おうって事になった。つと、それじゃあパトロールに行ってくるよ」

「はーい、気をつけてねのび太君」

着替えが終わり、スパイダーマンとなった僕は窓から夜の町へと飛び出したのだった。

今夜は、特にと言ったほど重大な事件は起こっては居なかった。在るとしたらカツアゲとか、空き巣といった感じの小さい規模の事件だ。それらをさっさと片付け、さあ家に帰ろうとしたその時だった。

(お願いです! 助けてください! もう時間がありません!!)

放課後の帰り道に聞いたのと同じ声が頭の中に響く。その他にも怪物によく似たう

めき声も……。僕のスパイダー感覚が警鐘をならしていた。これは危険だ。と。

「急がないと……」

そう呟くと、僕はウェブを使いスパイダー感覚の反応が強い場所へと向かっていった。

現場に急行した僕が見たものは目を疑うものだった。

黒い毛むくじやらの化け物。そして、魔法少女なコスプレをしそいつと戦うのはちゃんの姿があつた。……なあにこれえ。

そんな事を思っていると、化け物がなのはちゃんを捕らえようと触手を伸ばして来た。危ない！

T W I P ! S M A C K !!!

「O W W W W ! ?」

「おっと、触手なんか使つてどうする気だい？つと、そこの君、大丈夫？」

「す、スパイデイ!?ほ、本物なの!？」

ウェブスイングの要領で化け物を蹴り飛ばし、なのはちゃんの前に立つ。

「Y e s。正真正銘、キミの親愛なる隣人スパイダーマンさ、サインは後でいいかな？今は……」

「G R R R R R R R . . .」

「コイツをやっつけないとな」

なのはちゃんの問いにサムズアップで答えながら、化け物を見る。化け物は唸り声を上げて今にも飛び掛りそうだ。

「だ、ダメだ！危険すぎる」

なのはちゃんの頭の上にいるフェレットが僕を止めようとするが、大丈夫。と笑って返す。

「僕はこういう危険な事は何度もやってるから慣れっこさ」

「GUUU!!!」

化け物が咆哮を上げ飛び掛る。僕は慌てずに、なのはちゃんを抱きかかえると跳躍。安全な場所へと避難させる。

「君はここで待っていて。見せてあげる・・・僕の、スパイダーマンの戦いつてのを！」

なのはちゃんとフェレットにそう言うと、僕は化け物に向かって駆け出す。

「GUUU!!!」

化け物は僕を捕らえようと触手を伸ばすが、僕はことごとく回避。スパイダー感覚のお陰でヤツの挙動の一つ一つがスローモーションに見えるのだ。

K R A C K !!!

「GGYAUU!?!」

懐に潜り込んでアツパーカット！化け物のあごが跳ね上がり、体が浮き上がる。

T W I P !

「捕まえた！」

そのままウエブを使って捕まえると、高く飛び上がりグルグルと回す。そしてそのまま・・・、

「F i n i s h ! ! !」

C R A A A A A A A A A A A A S H ! ! !

「A G H ! ! ! ?」

化け物を叩きつける。化け物は地面に体をめり込ませピクピクしている。フェレットはその様子に唾然としていたが、すぐさまハツとなると、

「な、なのは！今だ、早く封印を!!」

「う、うん！リリカルマジカル、ジュエルシード封印!!」

フェレットの言葉に頷くと、なのはちゃんが杖を構えそう叫ぶ。すると驚き！杖から桃色の光が現れ化け物を包み込んだのかと思うと、そこに化け物の姿は無く。代わりに宝石のようなものが現れた。

「これで、ひとまずは大丈夫・・・かな？にしてもスゴイね。ただのコスプレかと思ったんだけど」

「え？あ、ありがとうございませう。何でこうなったのかは話せば長くなりますけど・・・」  
「ちよ・・・ちよつといいかい？」

僕となのはちゃんの会話に、割り込んでくるフェレット。

「ん、何かな？フェレット君、キミも僕のサインが欲しいとか？」

「あ、是非・・・じゃなくて！何でこの子といい貴方はこの姿で喋ってるのに驚かないの！？」

ノリツツコミをしながら僕に問いかけるフェレット。・・・そりやあ、過去に色々見てきたからなあ。それに、家にも居るし自称猫型ロボットの同居人が。

「ドラちゃんとかで慣れてるからかな？」

「誰なの？そのドラちゃんって」

「ドラえもんって言うの。私の先輩のお友達で、ポケットから不思議な道具を出すんだ」

「へ、へえ・・・」

「・・・僕蚊帳の外だなあ」

フェレットと話を始めるのを見て、ポツリと僕は呟く。まあ、それはそれでイイかも知れない。下手に発言して正体がばれるよりマシだ。

「そう言えば、さっきの化け物とあの宝石は・・・」  
「見つけたぞ」  
「ん？」

ふと気になった事をフェレットに問いかけようとした時、謎の声によって遮られる。

「ジュエルシードと死に損ないのスクライア族を同時に見つけるとは……、一石二鳥とはこのことだな」

声のした方に僕たちは振り向くと、そこには赤いレオタードを着た黒髪の女性が立っていた。

喋るフェレットとの不思議な出会いから始まった、化け物騒ぎ。そして、謎の女性との出会い。これが、僕達の町の……いや、全世界を巻き込む戦いの序章になるなんて……、この時誰も想像していなかった。

T o b e c o u n t e n u d e . . . .

## 第二話 『襲撃！マシーンベム！』

「アイアンクルセイド．．．、もうここまで来ていたなんて．．．」

「アイアンクルセイド？何なのそれって？まさか悪の秘密結社？見た目が何かそうだし」

突如現れた、謎の女性を見たフェレットの言葉になのはちゃんはそう問いかける。まさかと言うより実際そうだと思うんだけど．．．。

「貴様等には関係の無い事だ。それよりもさっさとそのイタチもどきとジュエルシードを超越せ！」

「えーつと、ちよつと質問いいかな？そのジュエルなんちゃらつて何？それを使って何をするつもりなんだい？」

女性の言葉に、僕はちよいと質問。女性は、ふつ。と鼻で笑うとこういった。「いいだろう、冥土の土産に教えてやる」

あつさりと教えてくれちゃったよ．．．これが悪の組織のお約束ってヤツかね．．．。ジュエルシードは、ロストロギアの一種で強大な魔力を持っている。次元世界を一つ吹き飛ばせるほどの力をな．．．。それを集め、全ての次元世界を支配する。それが我



等の目的だ。分かっただらそれを渡すのだ、渡せばお前達の住むこの世界は消滅させないようにしよう」

ロストロギアとか次元世界とかまた分からない単語が出てきたけど、大体分かった事がある。なのはちやんが封印したジュエルシード・・・これを渡せば、取り返しのないことになる。と言うことだ。だからこそ、僕の答えは一つ。

「悪いけど、渡すつもりはないよ・・・そのジュエルシードとやらが、そんなヤバイ代物でそれを悪い事の為に使うならなおさらだ」

「私も、スパイデイと同じ意見だよ」

「二人とも・・・」

Noだ。なのはちやんも僕と同じ意見のようだ。

「ふん、どうやら死にたいようだな。やれ!ニンダー!」

「[[[[ニー!]]]]」

女性の掛け声と共に、ニンダーと呼ばれる大勢の戦闘員っぽい服装を着た奴らが僕らを取り囲み、襲い掛かる。しかも大勢。だけれど、そんな状況で怯む僕スパイダーマンじゃない。

「おいおい、拒んだだけで寄ってたかってリンチとか酷いんじゃない? つと、なのはちやん戦える?」

「(え? 何で私の名前を? 名乗ったつけ、私) う、うん! やれるよ!」

「OK、相棒。<sup>パティ</sup>それじゃあアメイジングなオンステージと行こうじゃないか！」

僕となのはちゃんはお互い背中を預けながらそう言うと、ニンダー達へと向かっていった。

K A — P O W ! K R A C K !

「U H ! ? !」

「A U G G ! ? !」

近くに居たニンダーを殴り飛ばし、返す刀で背後のニンダーに回し蹴りをぶちかます。

「ニ—！」

「おっと！」

C R A C K !

「A A G G A ! ? !」

もう一人のニンダーがナイフで斬りかかってきたが、ブリッジ回避からのサマーソルトキック。

「ッ！」

着地と同時に、スパイダーセンスに反応。背後だ。しかもかなり近く……。拙いな……。これは間に合いそうにない。

BOOM!

「GAA!」

一撃をもらう覚悟をした次の瞬間、爆音と悲鳴が上がる。ダメージは……無いな。僕が振り向くと、倒れているニンダーが。

「や、やった! 上手く行つたよレイジングハート!」

『マスター、気を抜いてはいけません。まだ敵は残っています』

声が出たので見ると、攻撃が上手く行つたのか喜んでいるのはちゃん居た。杖が喋っていたようだが……、あれは一体なんなのだろうか。……と、今はそんな事を思つてる場合じゃないな。

「その杖さんの言う通り」

『杖ではありませんレイジングハートです』

TWIP!

なのはちゃんの背後に迫るニンダーがいたのでいち早くウェブを発射。ナイフを持つその手に貼り付ける。

「二、ニー!」

「にゃ?! びつくりしたあ……」

「油断大敵。喜ぶのはこいつ等を片付けてからだ」

POW!

「Oooooooooof!?!」

そして、ウェブを引つ張り引き寄せてきた所に顔面にストレートをぶちかました!

「ありがとうスパイデイ」

「おあいこさ。それよりもさっきの僕を助けた援護、助かったよ」

「にやはは・・・、そ・・・そう?」

照れくさそうに笑うのはちゃん。と、ここで彼女の持つ杖から再び声が。

『お二人共、まだまだ敵は残っています。話をする前に片付けましょう』

おっと、そうだった。早いトコ、ニンダー達を片付けよう。・・・そう思つて身構え

たその時だった。

「お前達、もういい!下がれ!貴様等ではこいつらは倒せん!」

「ア、アマゾネス様!」

先ほどの女性こと、アマゾネスの一声でニンダー達はすごすご引き下がる。それを見計らつて、アマゾネスはレオタードのポケットから、トカゲにロボットを組み合わせたかのような怪物のフィギュアを取り出した。

『ヤツら』との戦いに取つておくつもりだったが仕方ない。行け!暴君竜!」

「GUUU!!」

アマゾネスがそう言つてファイギユアを放り投げると同時に、眩い光を放つてソレがアマゾネスと同じ大きさに変わり、咆哮を上げる。

「気をつけて!マシンベムは、ニンダーとは比べモノにならないほど強いよ!」

フェレットの言葉に頷くと、なのはちゃんに援護を任せ、僕は暴君竜へと駆け出す。そしてそのままパンチを顔面に叩き込むが・・・、

ガン!

「く・・・、殴つたこつちの手が痺れちゃうよ」

顔がシャッターに覆われ、防がれる。硬い。・・・思わず殴つた手を押さえ呻く。と、ここでスパイダーセンスが警報を鳴らす。暴君竜が左手を鎌に変化させて僕を切り裂くつもりだ。

「GRRRRRRR!」

「おっと!」

振るつてきた鎌を避け、バック転で距離を取る。その時だ。

BLALLALLALLALLALLALLALLALLALL!

「おわわわわ!?!」

右手を突き出すと同時に、手が開き小型の剣のようなモノがマシンガンの如く吐き出される。慌てて回避。・・・コイツ、中々強い・・・!



「OUG!?!」

「まだまだ、これで終わりじゃないよ!」

TWIP!TWIP!TWIP!

派手に吹つ飛び倒れこむ暴君竜に向かって追いつちのウェブを発射し、拘束する。何時警察が来るか分からないのでこのまま一気にケリをつける!

「スパイダースーツ・ショックガンシステム、起動!リミッター解除!」

バチツ!バチバチバチツ!

このシステム、本来は敵に掴みかかられたり、スーツを脱がそうと外部からの力がかった時等にショックガンの電撃が発生しそれらから身を守ると言う最後の防御手段だ。

ショックガンシステムは全身に装備されているけど、使用する箇所を一箇所・・・つまり右足にショックガンエネルギーを集中させる・・・そう、最大の防御を攻撃に転用するのだ。

『Over drive』

「はっ!」

スーツから電子音が発せられると同時に、飛び上がる。両足を折りたたみながら、急降下と共に電撃を帯びた右足を暴君竜に向かって突き出した。

「マキシマム・・・スパイダー!」

CLAAAAAAAAAAAAAAAAP!!!

「EEEEEEEEEEEEYYYYAAAAAAAAAAAAAAAAAGH!!!」

顔面に完全に決まった。シャッターを閉じて防いでいるようだが、ショックガンエネルギーを帯びたコレには全くの無意味である。

・・・スタツ。

「GA・・・GA, GA・・・GA・・・」

KABOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOM!!!!

そして、僕が着地すると同時に、暴君竜は全身から煙を上げ仰向けに倒れると同時に大爆発を起こした。

「な・・・暴君竜がこうもあっさりと・・・」

「さて、どうする? まだ続ける? まあ、僕としてはこのまま君たちを拘束して警察に引き渡したいんだけど」

残るはアマゾネスと残りのニンダー達のみ。頼みの綱であるマシーンベムを倒され、うろたえるアマゾネスに問いかける。

「く・・・、ひとまず撤退だ!・・・貴様、名前を何と言う?」

「親愛なる隣人、スパイダーマンだ。地獄からの使者、情け無用の男・・・とか言うキャツ



チフリーズでもいいよ?」

「スパイダーマン……、今回で我々が大人しく引き下がると思うなよ!」

そう捨て台詞を残してアマゾネスは引き上げて行つた。ひとまずこれで一件落着いてわけだ。それはさておき……、

「君には色々と聞きたいことがある。フェレット君、君は僕の家に来てもらうよ」

「うん、分かつたよ。元々は僕がまいた種だし」

そう言つて、フェレットは僕の肩に乗る。アイアンクルセイドの事、ジュエルシードの事……分らない事が一杯ありすぎるからね。……後は、彼女だな。

「ど、どうしよう……、お父さんやお兄ちゃんに怒られちゃうよ……」

どうやら無断で夜遅くに出歩いたようだ。真つ青になつてあたふたしている。

「大丈夫、なのはちゃん。僕が送つていくよ。親御さん達に怒られたら弁護してあげるから。なんならドラえもんの道具で……」

「……あれ?なんでドラちゃんの名前を知つてるんですか?」

……あつ、しまった。うっかりドラえもんの名前を言つちやつた……。ジト目で僕に詰め寄るなのはちゃん。

「それに、さつき私の名前を呼んでましたし……。しかも、何気に喋り方がのび太先輩にそっくりだし……。もしかしてのび太先輩ですか?」

「ち、違うよ。僕があのだジで間抜けな野比のび太にそっくりな訳ないじゃないか。」

「やっぱりのび太先輩なんですわね」

正体を隠そうと慌てて言ったつもりが、逆効果だった……。こうなったらもう隠し事出来ないな。

「……うん、そうだよ」

「にやははは……。何でのび太先輩がスパイデイやってるのは後日聞きますから、とりあえず送ってってくださいね」

「うん、分かったよ……」

『ずくん』と効果音が出そうな感じで言う僕。バツが悪そうに苦笑いするなのはちゃんを連れて、家まで連れて行った。

なのはちゃんを家まで送り、一緒に謝った後、僕はフレットを連れて自宅に帰った。……ドラえもん、今日の事を何て話そう……。そう思いながら。

To Be Countenude……。

## 第三話「鋼鉄の男、来日」

—  
???

暗い、暗い、漆黒の闇の中……炎が揺らめく。それに照らされるは無数の機械の壁。そして、その玉座に座るローブを纏った顔半分を機械で覆った老人が座っていた。

そして、その前にはスパイダーマンとなのはに敗北したアマゾネスが平伏している。ここはアイアンクルセイドの基地である。

「……で、ジュエルシードを奪取に失敗。マシーンベムを失ったと言うわけか？アマゾネスよ」

「申し訳ありません。プロフェッサー」

低く冷たい声で言う、老人……プロフェッサーに冷や汗を流しながらアマゾネスは謝罪する。

「ハッ！情けねエ、それでもアイアンクルセイド最高幹部会『シニスター・シックス』の一員ですかア!？」

「ツ……！エレクトロ……！」

プロフェッサーとアマゾネスとは違う声が響き、アマゾネスが振り向くとそこには紫

電を纏った銀髪の少年が出てきた。エレクトロ口、と言うのが彼の名前であろう。

「仕方ないだろう！まさか地球の住人があれほどの力を持つとは思わなかったんだ！」

「ハ！どオだか、相手がガキとかだったから尻込みしたんじゃないやねエか？オマエは変な所で甘つちよろいヤツだからなア」

「なんだと貴様あつ!!」

「やめぬか！」

一触即発の状況。そこへ、プロフェッサーの怒号が響いた。途端に黙るアマゾネスとエレクトロ口。

「アマゾネスよ。ワシはお主を咎めるつもりはない。我々が地球の戦力を見誤ったが為起きた事だ、お主一人の責任ではない。よって此度の失敗は不問と処す」

「あ、ありがたき幸せ！」

お咎め無しの報を受け、深々と頭を下げるアマゾネス。そこへ、それよりもよオ。とエレクトロ口が口を挟む。

「スパイダーマンつつつたか？こいつはどオすんだよ、ドクターのポンコツをスクラップに変えたんだろ？コイツに殺らせるより、俺が出向いて殺った方が早いんじゃないやねエか？」

「うむ、無論その事でお主を呼んだのだ。エレクトロ口よ、お主にスパイダーマン討伐の任

を与える」

「ハ。流石、プロフェツサーは話が分かってンなア」

「く・・・、プロフェツサー！私にも汚名返上のチャンスを!!私もスパイダーマン討伐の任に」

ニヤリと笑うエレクトロを悔しそうに見ながら名乗り出るアマゾネス。だが・・・、  
「ならぬ。お主は引き続きジュエルシード搜索の任に就け」

「ですが、このままでは私のシニスター・シックスの一員としてのプライドが・・・」  
「しつけエゾ、アマゾネス」

命令に不服を申し立てるアマゾネスにエレクトロは、凄みを効かせながら睨みつける。

「テメエ、プロフェツサーに逆らうつもりか?今ここに、『ヴァルチャー』や『ミステリオ』がいりやあ・・・テメエ今頃、愉快な肉塊オブリエになつてンぞ」

「ッ!?!・・・わかり・・・ました・・・。プロフェツサーの意思に従います」

エレクトロの言葉に、アマゾネスは顔面蒼白になるとプロフェツサーにそう言つて、去つていった。

「フン。最初から素直にそうやって領いてりやあいいンだよ下つ端風情が・・・。そんなじゃあ、俺も行ってくらア。土産、楽しみに待つてろよ」

去つていくアマゾネスをエレクトロ口は、鼻で笑いながら部屋を後にしたのであった。

—羽田空港

「よお、久しぶりだなトニー」

空港ロビーにやってきた、顎鬚と口ひげが素敵なちよい悪風の男・・・スターク・インダストリーの社長である『トニー・スターク』を迎えたのは一人の男だった。一見歳若く見えるその男、だが纏っている雰囲気はその男がどのような修羅場を潜ってきたかを想像させる。トニーはその男を見て、微笑みながら返した。

「ああ、久しぶりだ滝。シールド日本支部長官の仕事はどうだい？」

「まあ、ボチボチだな。ニツクのオツサンやキャップは・・・言うまでもなく元気だよな」  
「まあね。・・・しかし、早いものだ。『あの事件』から5年なんだな」

トニーの言葉に、男・・・滝こと『滝 和也』は表情を少しその時を懐かしむ様子で頷く。

「ああ。暴走したウルترونが結成した『ウルترونショック』との戦いだな。・・・よく生きてたモンだぜ、お互い」

「全くだ。今でも不思議に思うよ」

滝の言葉に苦笑するトニー。ふと、滝は気になった事をトニーに問いかける。

「ところで、何で日本に？」

「ああ、近々東京でバニングス社が開催する科学コンテストに来賓として招かれたんだ。その社長とは友人同士でね」

そう言つてウインクするトニーに、滝は成る程な。と返した。

「そう言えば、『彼』は元気にしているかい？」

「ああ、アイツは元気だよ。顔見に行つてみるかい？」

滝の言葉にトニーは頷きながら答えた。

「勿論。行こうか、『翠屋』へ」

SIDE のび太

やあ、僕は野比のび太。僕は今、2つの事で頭を悩ませている。一つはなのはちゃんに正体がばれた事だ。勿論、誰にも話さないようにしてくれつて頼んだけど。この事についてドラえもんは……、

「全く……君は何てドジなんだ」

呆れた顔でそう言われた。……面目ない。そしてもう一つの悩み事……それは、

『のび太！なのは！ジュエルシード反応だ！』

ジュエルシードの事だ。言っている傍から、ユーノ（あのフェレットの事だ。何で名前を知ってるのかはこれから話す）が念話を飛ばし、僕となのはちゃんに語りかけてくる。

読者の皆は『一体なんのこっちゃ？』と首をかしげている人が多いだろう。あの夜から、数日後。僕となのはちゃん、そしてドラえもんは、ユーノから自身の名前。そしてこの世界に來た理由。そしてジュエルシードの事を話した。

ジュエルシードは元々、ユーノがとある遺跡で発掘し持ち帰ろうとした所をそれを狙ったアイアンクルセイドから襲撃を受け、それを運んでいた船は崩壊。ジュエルシードが21個、すすきヶ原に散らばったらしい。

本来のジュエルシードの用途は持ち主の願いをかなえる為のものらしいが、力の発現が不安定であり単体で使用すると暴走する危険性があるそうだ。良くて、あんな化け物のような姿で暴れる程度。悪くてこの世界が吹っ飛ぶ程度の被害がでるらしい。∴洒落にならん。

そんな危険なものがすすきヶ原にあるのは勿論、それをアイアンクルセイドの連中が悪用する。なんて事は親愛なる隣人たるこの僕、スパイダーマンが黙っているわけがない。

勿論、なのはちゃんも『放っておけない』と協力を申し出た。

ユーノ自身は僕らを危険な事に巻き込みたくない。と消極的であったが、僕となのはが説得で折れ、現在に至るって訳。

おっと、話を元に戻そう。



『分かった、すぐ行くよ』

ユーノにそう念話で伝える。何で念話が使えるのかって？ドラえもんから貰ったひみつ道具『テレパシー』を食べたからさ。

「先生、すみません。トイレに行ってきます」

僕は先生にそう言うと、教室を出てトイレに駆け込んだ。そして、ドラえもんから貰ったスペアポケットからコピーロボットを取り出し、ボタンをスイッチオン。すると、みるみるうちにコピーロボットは僕そっくりになった。

「じゃあ、頼んだよ」

「ああ、任されたよ」

僕のコピーロボットはそう頷くと、トイレへと出た。これが、昼間に事件があった時のからくりって訳。コピーロボットがあれば、スパイダーマンとして昼間活動していても気がつかないって事だ。僕はスパイダーマンスーツに着替えると、トイレの窓から外へと出た。

「なのはちゃん！ユーノ！ジュエルシードは？」

「もー。スパイデイ、今は『なのは』じゃなくて『リリカルガール』って呼んで！」

学校から少しはなれた位置でなのはちゃん・・・もといりりカルガールと合流し、声をかけるが本名で呼ばれるのが嫌なようで頬を膨らませ反論された。

コスチュームも、魔法少女のような服装からコミックヒーローのようなスーツに、マントといった出で立ちだ。さしずめ、バツ〇マンのロビンを女の子風にしたような格好かな？

ちよつと説明させてもらうと、僕と一緒にジュエルシード搜索の手伝いをする際にあたり『スパイデイのサイドキックになるんだからそれ相応の格好とヒーローネームは必要だよね?』ってな感じで今に至るって訳。

そういうえば、アリサちゃんとすずかちゃんに聞いたが、彼女結構なアメコミファンらしく部屋にはバットマンやらスーパーマンやらフラッシュユやらの漫画やグッズが大量に飾られているらしい。

「ゴメンゴメン、リリカルガール。ジュエルシードの反応はどつちから?」  
「あつちだよ」

リリカルガールの代わりにユーノがジュエルシードが反応している場所を指差す。その方向に進んでみると・・・

「WOO!!!」

「わあああ!?!怪獣だ!怪獣が出たぞ!」

「逃げろー!」

「アイエエエエエ!」

「こんな所に居られるか！俺は逃げるぞ！」

居た。ケルベロスのような怪物が市街地で大暴れしている。

「あの怪物から、ジュエルシードの反応がする。．．姿からして犬を取り込んだんだ。気をつけて二人とも！生物を取り込んで実体を持ったジュエルシード暴走態は手強いよ」

「分かった。それじゃあ行こう、なn．．じゃなかったりリカルガール」

「うん！」

と、まあ今日も今日とてジュエルシード回収の仕事で大忙し。これが二つ目の悩み事って訳。ちなみにこの後、犬を取り込んだジュエルシード暴走態は退治してりりカルガールが封印した。

「ふうく．．．疲れた」

「どうしたの？のび太さん」

帰り道、疲労感からうなだれている僕にしずかちゃんが声をかけた。

「ん？ううん、何でもないよ」

「そう？」

疲れてはいるが、無理に笑みを作ってしずかちゃんに答える。しずかちゃんは納得が言っていない様子だったが、それ以上問いかけることは無かった。

「あ、そうだ。近々バニングスグループで科学コンテストがあるのよ。皆で行かない？」  
「「「「勿論」」」」

そこへ、アリサちゃんが僕らに問いかけてきた。科学コンテストか・・・、どういったものがあるんだろうか。それを楽しみにしながら僕らは帰路へと着いた。

S I D E O U T

S I D E なのは

「ただいま、お母さん！」

「おかえり、なのは」

私ที่บ้านに帰ると、お母さんが凄く嬉しそうな顔で出迎えてきた。・・・何か嬉しい事でもあったのかな？

「?どうしたの、お母さん」

「ふふつ、貴方にビッグニュースよ」

「ビッグニュース？」

何だろう?・・・ひよつとして、私がお姉ちゃんになるのか・・・?それとも・・・。

「それはね・・・ジャジャーン。出てきてトニーさん」

「やあ、なのはちゃん。元気にしてたかい？」

お母さんの声で、ひよつこりとドアから現れたのは顎鬚の素敵なちよい悪風のおじさ

ん。それは私のよく知る人だった。

「トニー叔父さん！」

そう、5年前……一人ぼっちで泣いていた時に声をかけてくれたトニーおじさんだったのだ。

S I D E O U T

再びS I D E のび太

「ふう、こんなものかな？」

今僕は夕食を食べた後、スパイダーマンとしての夜のパトロールをやっていた。昼間のジュエルシード暴走態との戦いで疲れが溜まっているが、これだけは欠かせない。

今夜起こった事件は、強盗や食い逃げ……といったモノだった。それらを片付け、今帰る途中だ。

「ん？」

ふと、あるビルの屋上に光る何かを見つけそちらに向かう。そこには、宝石のようなものが落ちていた。……ジュエルシードだ。まだ、暴走はしていないようだ。

『どうしたの？のび太君』

「ドラえもんかい？ジュエルシードを見つけた、暴走していない个体だ。ユーノかなのはちちゃんに繋いで……」

ドラえもんに通信している最中、何かの気配を察知した。しかも二つだ。こつちに向かつてきている。

『のび太君?』

「悪い、お客さんのようだ。すぐにかきなおよよ」

そう言つて通信を切り、気配のした方へ向き直る。そこには、金髪をツインテールにした黒を強調した服を纏つた少女と、犬耳のようなものを頭に生やした少女が居た。

「そのジュエルシードをこちらに渡して下さい」

金髪の少女は僕にそう言つて、ハルバードのような武器を僕に突きつけた。

・・・今日、夜は長くなりそうだ。

T o b e c o u n t e n u d e . . .

## 第四話 「スパイデイVS黒き魔法少女!」

「そのジュエルシードをこちらに渡して下さい」

そう言って、少女はハルバードのような武器を僕に突きつけた。一体この子は何者だ？

「あー・・・その前に君達一体何者？ジュエルシードを知ってるって事はアイアンクルセイドの連中の一人かい？」

「??？」

「えーっと、何なんだい？質問を質問で返すけどさ。そのアイアンならかいたらつてのは？」

僕の言葉に、少女は首をかしげ犬耳の女性は僕に問いかけた。・・・どうやら連中じゃあないらしい。

「あー、こっちの話。んで？コレが欲しいんだっけ？」

「はい」

「悪いけど、このジュエルシードは友人のものなんだ。欲しいならちゃんとお金を取ら

なきや」

肩をすくめて僕は少女の申し出を断った。

「そうですか、ならば力ずくになりませんがジュエルシードを頂きます!」

・・・何でそうなるのかなあ。そう胸中で咳くと同時に、

「はああっ!!!」

少女が斬りかかってきた。

「速い!」

そりゃあ、もうスパイダー感覚でも捉えられないほどに。咄嗟に紙一重でかわす。

「アタシも忘れてもらっちゃ困るよ!」

「おわっ!?!」

その隙を狙って犬耳の女性が回し蹴り。とつさに、ガードして防ぐ・・・が重い。・・・

ガードした腕が痺れるほどだ。

(この二人・・・、手強いぞ)

恐らく、どちらも僕と互角か、それ以上。・・・それを2人同時に相手をするのだから、こちらが圧倒的に不利だ。・・・なんとかして打開策を練らないと・・・。

『Photon lanceer!』

「ファイア!」



少女の持つ杖から音声が発せられると、8本ほど光の槍が現れ、僕に向かって飛び出してくる。

「くっ!」

何事もなく回避する。……だが、それを予測して少女と犬耳の女性が、僕に接近してきた! マズイ、スパイダー感覚が警鐘を鳴らすも間に合わない!

「ごめんね、だけど……母さんの願いを叶える為にも……ジユエルシードは必要なんだ!」

「これでも喰らいな!」

K R A C K !

「G A A ! ?」

右ストレートとハルバードの一撃が僕の顔面に直撃! そのまま近くのマンションに吹っ飛ばされ、窓を突き破って部屋に転がり込んでしまう。……空き部屋で助かった。やはりあの犬耳の女性の一撃は厄介だ。何とか、当たる寸前にポイントをずらしたから一発で気絶は免れたが……結構効いた。

(……まずいな……何とか逆転の一手を考えないと……。何か道具は……。ん?)  
そう思いスピアポケットを探る。取り出したものを見てみると、コピーロボットだった。その時、僕に電流走る! これを使えば……!

## SIDE OUT

「ねえ、アルフ」

「何だい？フェイト」

「ちよつとやりすぎたかな？」

「さあね。手加減はしたから、ちよつと気絶してるだけだと思うよ」

スパイダーマンが突っ込んだ部屋を見ながら会話をする金髪の少女、フェイトと犬耳の女性、アルフ。二人はさっきの一撃でスパイダーマンの意識を刈り取ったと思っているようだ。

「母さんから聞いたけどジュエルシードって結構デリケートだから、ちよつとした刺激で暴走するみたいなんだから気をつけないと」

「へいへい・・・つと。とりあえず、封印よろし・・・」

アルフがそういいかけたその時だった。

TWIP!

「なっ!?!」

飛び出してきたのはスパイダーマン！そのままウェブを使った反動でアルフに接近し殴りかかる！が！

「あまい！」

SMACK!

「Oof!?!」

回避され、カウンターにボディに一発重たいパンチをお見舞いされる。

「まだ立ってられたつてのは驚いたけど・・・まだまだだね。バインド!」

そしてそのままバインドでスパイダーマンを拘束。・・・その時だった。

TWIP!

「へ?うきやあああああああああ!!?!」

「あ、アルフ!?!」

突如、別の方向からウエブがアルフに張り付き、その方へ引つ張られてしまう。その引つ張った張本人は・・・。

「はははははははははは、はははははははははは!すり替えておいたのさ!」

「ホ!?!It, s no money・・・じゃなくて何時の間に!?!」

そのマンシヨンの屋上。いつの間にかぐるぐるまきまきに縛られたアルフの傍らにポーズをとりながら高笑いをする赤と青のカラーリングのスーツの男。言わずもがなスパイダーマンだ!思わずフェイトは驚きの声!

Sid e のび太

(何とか上手く行ったな・・・)

マンションの屋上でぐるぐる巻きにして縛った犬耳の女性を見ながら僕は胸中で呟く。

種はこうだ。あの空き部屋で、僕はコピーロボットを起動させ予備のスパイダーマンスーツを着せた。そして、彼が囿になっっている隙に屋上に移動。

そして、そこからコピーに気をとられている犬耳の女性にウエブで狙い撃ちにした。と言う感じだ。

「いつの間にかは企業秘密さ。サンキュー、僕のコピー」

T W I P !

驚きながら問いかけてきた金髪の少女にそう返して、僕はウエブで落ちようとしているコピーロボットを回収。ボタンを押して元に戻すとポケットにしまった。

「さてと、どうする？残るは君一人だ」

「……勿論、戦います。これだけはどうしても譲れないから」

……ま、そうなるか。少女が僕の問いに答え、身構える。

動いたのは同時だ。

先に仕掛けてきたハルバードの攻撃を避け、パンチを放つ。だが、彼女も回避！中々の素早さである。

「なら……これはどうっ？」

『blitz action!』

「鎌に変化した!?・・・しかも、更に速度が!」

これは驚き、彼女の持つハルバードが変形し、ビーム刃の鎌となった。それだけじゃない、速度も更に上がった。そう、スパイダー感覚で捉えられないほどに。

「遅いですよ!」

「ツ!」

彼女から放たれる斬撃を紙一重で回避。・・・だが、完全にはかわしきれずに、胸のスーツが裂け、そこから赤い線が走る。

「中々やるね」

「そっちこそ、今のを避けるなんて流石ですね」

内心冷や汗をかきながら少女に言う。少女も僕を褒めていた。そして、再び互いに身構える。

「うおおおおおおつ!!」

「はああああああつ!!」

そして、吠えた。僕は拳を、彼女は鎌を手に互いに走り出す。その時だった。

CLAAAAAAP!!!

「ツ!?!危ないツ!?!」

「キャアツ?!」

突如、スパイダー感覚が警報を鳴らし、咄嗟に少女を抱きかかえウエブでその場から離れる。すると、僕らが居た一带に落雷が落ちた。もしこのままあそこに居たら落雷の餌食になっていただろう。

「大丈夫?」

「は、はい大丈夫です」

少女をおろし問いかける。どうやら彼女は無事のようにだ。どこからか声が聞こえてきた。

「ハツハアア!今のを避けたア、たいしたモンだなア!オマエ!」

声のした方を見ると紫電を纏い、高笑いをする銀髪の少年が宙を浮いていた。コイツは一体!?

「君は誰だ!」

「俺の名はエレクトロ!オマエをぶつ殺す為にやって来たアイアンクルセイドが最高幹部会『シニスター・シックス』の一人だア!」

謎の少女達の次は、アイアンクルセイドか……。一難さつてまた一難だな。

T o b e c o u n t e n u d e . . . .

## 第5話「出動!アイアンマン!」

SIDE なのは

15年前、すぎが原のとある公園。

私が、トニー叔父さんと出会ったのは4歳の時。

その時の私は、お父さんが仕事中に大怪我をして、お母さんやお兄ちゃん達はお父さんのお見舞いやお仕事で忙しくて、ずっと一人で寂しい想いをしていた。

そんな時、トニー叔父さんは私に声をかけてくれた。

「君が高町なのはちゃんかい?」

「・・・叔父さんは?」

「おじ・・・僕はトニー・スターク。君のお父さんの友人さ」

『叔父さん』と言う言葉に微妙な反応を見せたけど、微笑みながら私に自己紹介をした。

「桃子さんから、外に出て遊んでいるって聞いたけど。友達と遊んでいたんじゃないの?」

「・・・ううん」

俯きながら叔父さんの言葉に答える。そして、間を置いてポツリポツリとだけ、叔父さんに自分の思いを伝えた。

「本当は・・・お母さん達と一緒に居たいけど、お店とか忙しいし、我儘を言つて迷惑をかけたくないから・・・だから・・・」

「成る程ね。・・・だけど、良いんじゃないかな？我儘を言つても」

「え？」

顔を上げ、叔父さんを見る。優しげな笑みを浮かべ、続けた。

「寂しいんなら寂しいって、言えば良い。一緒に居たいなら一緒に居たいってそういえばいいのさ。良いんだよ、我儘を言つて迷惑をかけても。子供つていうのは親に迷惑をかけてナンボだからね」

叔父さんはそう言つて、ウィンクをし私の頭を撫でた。その時の手のぬくもりは今も覚えている。そしてそのぬくもりが『今』へと繋がる勇気をくれたんだ。

「叔父さん・・・、私お母さん達に自分の気持ちを伝えるよ」

「その意気だ。・・・つと、そろそろ日が暮れるな。一緒に帰ろうか」

そう言つて、叔父さんはポケットからスマホを取り出し、操作を始めた。すると・・・、ガシャン！

空から何かが落ちてきた。赤と黄色が目立つメタリックなボディの叔父さんと同じ



身長のロボット。当時の私はそれを見て目を丸くしてたっけ。

そのロボットの背中がパカッと割れ、そこにおじさんが入っていく。背中を閉じると同時にロボットの瞳に光が宿った。そうして、私を抱えて一言。

「空を飛んで一気に行くぞ。なのはちゃん捕まってるよ?」

「は・・・はい!」

しつかりと叔父さんにしがみつき領くと同時に、私と叔父さんの体は宙に舞った。そう、飛んだのだ。文字通りの意味で。

Z i i i i i i i i i i i i i i i i n g !!

「にや、にやあああああああああああああ!!?」

思わず叫び声が出てしまった。

「ちよつと早すぎたかい?」

「だ・・・大丈夫です・・・。ちよつと驚いただけですから」

この時の私の顔はちよつと引きつった笑顔だったんだろうと思う。やがて、一寸だけだけどその速さになれば、外に目を向けると・・・。

世界がまるで違って見えた。私の視線には、地平線に沈む赤い夕日。そして、足元には慣れ親しんだすすきヶ原の町並み。

—綺麗だなあ・・・。

子供心にそう思った。

「ねえ、おじさん」

「なんだい？」

「おじさんは一体何者なの？」

「僕が何者かって？」

私の問いにおじさんは（マスクの下ではとびつきりの笑みを作っているだろう）こう答えた。

「トニー・スターク、またの名をアイアンマン。正義の味方さ」

これが、私とトニーおじさんとの出会い。そして私が正義の味方に憧れる理由。

SIDE OUT

「随分と久しぶりだな、トニー」

「ああ、そうだね」

夜、閉店により客が誰も居ない喫茶店翠屋の客室。そこにあるテーブルにて、なのはの父親である高町士郎とトニー・スタークはワインを手に語り合っていた。

「滝さんから聞いたよ。バニングス社主催の科学コンテストで来賓として呼ばれたんだって？」

「まあね。それが無くても、近々様子を伺おうかなって思ってたんだよ」

士郎の問いに、トニーはそう答え、ところで。と付け加え続ける。

「身体のほうは大丈夫かい? 風見……いや、今は『高町』か?」

「問題はないさ。ただ……二度と『V3』にはなれないが」

トニーの問いに士郎は自嘲気味に俯き加減に答え、続けた。

「5年前の戦いで無茶をして『火柱キック』を放ったのが祟ったらしい。……今、こうしてなんとか日常生活を送れるレベルには回復しているが……」

「昔のように『仮面ライダーV3』として戦うことが出来ない……と言うことか」

「……そうなるな」

「……と士郎は、顔をあげ続ける。

「少し、こうなった事に感謝しているんだ。今までV3としてヒーローとしての活動で、今まで出来なかった家族との触れ合いがこうして出来る事に……さ」

「成る程ね。……ん?」

士郎の言葉に、トニーは微笑みをこぼしながら窓を見てみると建物から建物へと飛び移っていく人影を見た。

「どうした?」

「いや、今……建物を飛び移っている人影が……」

トニーの言葉に、士郎はああ、それか。と答える。

「そいつはスパイダーマンだろうな」

「スパイダーマン？」

「2年前から現れたすすきヶ原で活動しているヒーローだ。クモの糸を巧みに操って町を駆け回っては犯罪者を捕らえるそうだ」

士郎の説明を聞き、ふうん……。とトニーは返し、席を立った。

「悪いな高町、ちよつと用事が入った」

「……とか言つて、スパイダーマンに興味を持ったか？」

少々呆れ気味に言う士郎に、トニーはニヒルな笑みを浮かべながら、

「まあね」

そう言つて翠屋を後にしたのだった。

そして、一方なのはの部屋では。

SIDE なのは

「へえ、あの人はそう言つた関係だつたんだ」

「にやはは、まあね」

私は、部屋のベッドでユーノ君と会話をしていた。内容は勿論、トニー叔父さんの事。おじさんとの出会いとか、そういつたのを話した。……あ、言うのを忘れていたけどユーノ君はこつちで引き取る事にしたんだ。勿論、皆の承認を得てね。

「おじさんの他にもヒーローがいてね、それで・・・」

『なのはちゃん!聞こえる!?!』

ドラちゃんから念話だ。かなり切羽詰まっているみたい。どうしたんだろう?

『どうしたの?ドラちゃん』

『のび太君がジュエルシードを見つけたみたいなんだけど、誰か来たみたいだからって通信を切ったんだ。それから連絡が全く無くて・・・』

『誰か・・・?まさか、アイアンクルセイド!?!』

これはユーノ君だ。

『分からない。・・・夜分遅くに申し訳ないけど、のび太君を探してきてもらえるかい?』

そんな事は言われなくても分かっている。

『分かったよ』

Yesだ。

『ありがとう、気をつけてねなのはちゃん』

そう言って、ドラちゃんは念話を切った。さて、ここからはリリカルガールの出番なの!

S I D E O U T

S I D E のび太

CLAP!CLAP!

「ほらほオーら、どオしたア!!!」

「どわっど!?!」

現在、僕……スパイダーマンこと野比のび太は苦戦している。理由は言わずもがな、エレクトロ口だ。

両手から発しているスパーク。それをういて放たれる弾幕の所為で迂闊に近づけないのだ。近づけたとしても、格闘の腕も僕と互角かそれ以上。……強敵だ。

「きゃあっ?!」

「フエイトッ!」

悲鳴が上がったので振り向くと先ほど僕と戦っていたあの二人だ。金髪の少女……犬耳の女性はフエイトと呼ばれていたから多分それが彼女の名前なのだろう。彼女が被弾し、落ちていくのが見えた。助けないと!

TWIP!

「おっと、大丈夫?」

「あっ……、一度だけじゃなくて二度もすいません」

エレクトロ口から避難するようにウェブ移動しながら落ちていくフエイトをキャッチ。んでエレクトロ口からかなり離れた位置の建物の屋上へと着地。

「いいっていいって、それよりさっきの犬耳の女の人の言う事が正しいならフェイト……が君の名前でいいんだね?」

「え? あ、はい」

やっぱりそのようだ。

「フェイト、か……いい名前だよ。君の名を付けてくれた親はいいセンスしてるね」

「そ、そうですか? あ、ありがとうございます」

顔を赤らめながら、僕にそういうフェイト。

「あー、ゴホン。お二人さんいいムードのところ悪いんだけどさ……」

「へ?」

「ふえ!? ち、違うよアルフ!!」

犬耳の女性……アルフの言葉に、慌てて抗議するフェイト。……一体どうしたんだろうか? まあ、それはさておきアルフの言いたい事は分かる。ちよつとお喋りすぎたようだ……。

「ま、そういうことにしとくよ。……んで、どうやってあの電気野郎に対抗しようか?」

「……そうだ。私、いい案があるよ」

対抗策を思いついたのかフェイトが切り出す。……一体何なんだろう。

「何だい? フェイト」

「あのね……」

SIDE OUT

「チ……あいつ等ちよこまかと逃げ回りやがって。何処に行きやがったんだア?」

エレクトロは辺りを見回しながらスパイダーマンらを探していた。だが、一向に見つからずただイライラだけが募るばかりである。

(あア……、何だア? 何なんですかア? 結構強エだろオなと思つてたら拍子抜けじゃねエか。クソジジイの野郎が……つまらねエ仕事させやがって……!)

仕舞いには胸中でこんな任務を押し付けたプロフェツサーに悪態をつき始めた。そのときである!

TWIP!

「ああ?」

ビルの陰から躍り出る2つの影、スパイダーマンとフェイトだ! フェイトは空を飛びながら、スパイダーマンはウェブ移動しながらエレクトロに迫る!

「ハッ! とうとう諦めて俺に殺されに来たんですかア!」

「違うね、君に勝つためだ!」

TWIP! CLAP!

そう言葉を交わすと同時に、発射されるウェブと電撃。互いにそれを回避する。



「勝つだア?寝言は寝て言えやア!」

エレクトロ口の叫びと共に放たれた拳。だが、スパイダーマンは空中でブリッジして回避する。そして、

POW!

「残念だけど、僕は起きてるから寝言じゃないのさ」

「UH!?く、そがア!」

その体勢からサマーソルトキック!エレクトロの顎を跳ね上げた。激昂し、反撃しようとするも・・・、

「私を忘れないで!」

『photon lancer!』

「フアイア!」

BOOOOM!!

少女の声と電子音、それが発せられると共に、8本の光の槍が放たれ、エレクトロに直撃する。

「GAA!?!・・オマエら、イイゼ・・イイゼエ!そんなに死にたいならそうしてやらア!!!」

その攻撃により完全にキれたエレクトロは、両手に電気を溜める。そして、大きく両

手を広げ叫んだ。

「ここ一帯ごと丸ごと吹き飛ばしてやらア！くたばり・・・」

「チェーンバインド！」

ガキン！

「ンなア!!」

そして、両手を振り下ろし溜まった雷撃を放とうとしたところ、別の女性の声と共に鎖で体の自由を奪われる。これは一体!?

「作戦、成功だね」

その声と共に現れたのはアルフであった。

SIDE のび太

「アルフ、ナイス」

「へへ♪」

僕はそう言つてアルフに親指を立てた。タネ明かしはこうだ。

アルフはチェーンバインドと言う魔法を持っているそうなので、僕とフェイトがエレクトロの注意を引き付け、アルフがバインドで拘束する。と言う寸法だ。

結果、エレクトロはバインドで拘束され作戦は大成。つて訳・・・さてと、後は僕とフェイトの出番だ！

「スパイダースーツ・ショックガンシステム、起動!リミッター解除!」

「決めるよ、バルディツシュ」

『Yes, sir!』

バチツ!バチバチツ!

キイイイイイイイン……。

僕は、ショックガンシステムを起動させ、フェイトは黄色い魔法陣を発生させると、手から黄金の球体を作り出していた。

『Over drive』

『Thunder smasher』

「マキシマム……」

「サンダアアア……」

これで決まりだ!

「スパイダアアアアアアアアアアアアアアアア!」

「スマツシャアアアアアアアアアアアアアアア!」

S M A S H !!!

「E Y A G H !!!」

フェイトと僕の声が重なり同時に、金色の閃光が放たれる。それを吸収しさらに威



右手に極大の紫電の塊を作り僕らにぶつけようとしてくる。あれは……マズイ!僕  
のスパイダー感覚が物凄く警鐘を鳴らしている……。もうダメだ……。!!!

ZAP!ZAP!

「Oof!?!」

その時だった、レーザーのようなものが飛び出し、エレクトロを撃った。これは一  
体……!?!

「やれやれ、どうやら穏やかじゃない場面に出くわしちゃったぞ……」

声のした方を僕とフェイト、アルフは向く。そこには赤と金でカラーリングされた口  
ポットのような人物が飛んできていた。

「あ、あなたは……」

その姿を僕は知っている。……いや、この地球に住む人間なら知らない人間は居な  
い。なぜなら彼は……

「アイアンマン!?!」

あのアベンジャーズの一人、トニー・スタークこと『アイアンマン』なのだから。

「さあ、パーティーの始まりだ!」

T o b e c o u n t e n u d e . . .

## 第6話 『アイアンマンVSエレクトロ』

SIDE のび太

今、僕の心境は驚きと興奮で満ちている。何故ならば……、目の前に居る赤と黄色で彩られたパワードアーマーを着たヒーロー。

「さあ、パーティの始まりだ！」

アイアンマンが居るからだ。ブーストを吹かせ、エレクトロに迫る！

「糞がア……よくもやりやがったな！」

CLAP!CLAP!

エレクトロが電撃を放つが、アイアンマンはそれを回避！そして……、

SMACK!

「AUG!?!」

アッパーを叩き込む。大きくのけぞるエレクトロ。続けざまに膝蹴りを腹部に叩き込んだ！

「OUG!?!」

強い。僕とフェイト、アルフが苦戦したエレクトロをこうも圧倒している。……こ

れが・・・『アベンジャーズ』。

「・・・すげえ」

僕は生で見るアベンジャーズメンバーの戦いに思わず眩いた。

「な・・・め・・・る・・・なアアアアアアアアアアアアッ!!」

咆哮。そして、エレクトロは振り払うようにアイアンマンに拳を振るう。それを造作もなく受け止めるアイアンマン。

—ニヤリ。

その瞬間、エレクトロの顔に笑みが走る。・・・まさか、拙い!

「かかりやがったな? シビレちまえエ!!!」

CLAAAAAAAAAAAAAAAAAP!!!

「ぐあああああつ!?!」

僕の嫌な予感通りだ。エレクトロはつかまれた状態のまま放電! アイアンマンは苦悶の叫び声を上げる。

「カカカカカカカ! このまま真っ黒こげだア!」

拙い・・・、いくらアイアンマンといえど、これ以上感電した状態なら・・・。僕が助けに行こうとしたそのときだった。

「ぐああああああ・・・なんてね」

「は？OWWW!？」

KA—POW!

苦悶の叫びから一転、茶目つ気たつぷりの声と共に、エレクトロの顔面にアイアンマンの鉄拳がめり込んでいた。そのまま吹っ飛び、近くにあったビルの壁にめり込む。

「え!?!あれほどの電撃を喰らってどうやって!？」

「簡単な事さスパイデイ。このスーツには絶縁処理が施してある、だから無事なのさ」

やはりスターク社の技術力は格が違った．．．って言ってる場合じゃないよね？何で僕の名前を知ってるんだらう？

「何で、僕の名前を？」

「風の噂ってやつさ。ヒーロー君（本当は高町から聞いたんだけど．．．）」

バチバチバチ．．．。

「イイゼ．．．イイゼエ．．．クカカカカカカ．．．さいっこオだよオマエら．．．」

おっと、そんな事を言ってる場合じゃなかったな。壁に埋もれていたエレクトロが脱出して両手に電撃を溜めている．．．これはヤバイな。下手すれば僕らだけじゃなくてここらへん一区画が吹っ飛ぶ危険性がある。

「アイアンマンさん．．．でしたっけ？ここは私達が」

「いや、君達は下がっていてくれ。こういった悪い子の躰は僕達、大人の役割だ」





「むしろ助かりました。あのままだったら、僕ら危なかったですし」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとう」

フェイトとアルフもお礼を言う。

「いいって、ヒーローは助け合ってナンボだから」

「は、はあ……」

パカッとフェイス部分を開き、ちよい悪な顔をウィンクさせながらフェイトに言うアイアンマン。そこへ……、

「スパイデイ……ってアレ？これどうなってるの？」

なのはちゃんことリリカルガールだ。目の前の光景に頭がついてこないでいる。

「それと……、見ない顔だけど誰？」

「ああ、ちよつと色々あったんだ。後で話すよ。なのはちゃん……じゃなかったリリカルガール」

「また、本名で呼んでる。リリカルガールだって何回言えば……」

「ん？今、なのはちゃんって言ったか？そのガール」

「にや!?!ト、トニーおじさん!?!」

いつの間にか僕の後ろに居たアイアンマンがリリカルガールに向かって言う。リリ

カルガールはこの世の終わりを見たかのような顔だ。

「なのはちやん、一体どういう事なのか説明してもらおうよ」

「ふ……ふええええ……」

なんとというか、『ゴゴゴゴゴゴ……』と言う何とも奇妙な効果音が似合いそうな雰囲気と言うアイアンマンに、凄く涙目のリリカルガール。はつきり言っつて、カオスのキワミだ。

「あ、あのー」

おずおずと、フェイトが声をかけてくる。

「何か用かな？」

「これ……一体どうなってるんです？」

「……色々あるのさ」

この時、僕は凄く遠い目をしてたろうな。と思う。

——んでもって、のび太宅に戻って説明。勿論、フェイトとアルフも同伴である。

「成る程ね、大体分かった」

アイアンマン、ことトニー・スタークさんに洗いざらい全部話した。ジュエルシードのこと、アイアンクルセイドのこと。そして今回の事。

「ううう……だからお父さん達には言わないで欲しいの……」

涙目で、トニーさんに懇願するなのはちやん。．．．トニーさんは暫く黙った後、こ  
う答えた。

「分かった、お父さんには黙ってあげるよ。．．．その代わり．．．」

ゴクリ．．．。

なのはちやんだけじゃない、僕やドラえもんもユーノ。そして何故かフェイトとアル  
フも固唾を呑んで見守る。

「そのジュエルシードを一つ譲ってくれないか？ 実に興味深い」

「だ、ダメですよ！」

「ユ、ユーノ君！ ここは折れて欲しいの〜！ 下手したら、私ヒーロー活動出来ないよお  
！」

トニーさんの提案に、ユーノは即決拒否。なのはちやんはユーノになきつく。

「冗談だ。．．．そのジュエルシード捜索に僕も協力させてもらえないか？」

「トニーさんも．．．ですか!？」

「ああ」

あのアイアンマンこと、トニー・スタークと肩を並べて戦える。．．．まるで夢のよ  
うだなあ．．．。

「なら、僕の夢確かめ機で試してみる？」

「折角だけど【お断りします】ドラえもん、さりげなく僕の心読むの止めようか」

時折、僕の心を読みなされるよなあ……この猫型ロボットは……。

「で、でも悪いですよ。只でさえ、のび太やなのは、ドラえもんにもまで助けてもらってるのに……。更に、3人にも手伝ってもらうなんて」

「コレもヒーローの務めさ。それとこういうのは人数が多いのがいい」

「そーそー、助け合いが一番だよ（ま、後でドサクサにまぎれてジュエルシード奪うつもりだけどね……）」

「ア、アルフとトニーさんの言うとおりだよ。ユーノ」

渋るユーノを諭し、こうして新たにトニーさん。成り行きだけどフェイトとアルフもジュエルシード搜索を手伝う事になった。

―そして、なのはとトニーが帰り……。

グウウウウウウウウウ……。

唐突にお腹の鳴る音がした。その主は僕ではない……、

「……あう」

フェイトだった。顔をコレでもかと思つ赤にしながら俯いている。

「フェイト……君、ずっと空腹状態で僕と戦ってたの？」

「う、うん……」

頷くフェイト。・・・一体何を食べてるんだろう？そう思い、聴いてみた。

「カロリー〇イトと冷凍食品だよ」

「・・・マジで？」

「マジで」

結論から言おう。

酷い、酷すぎる。そんな食生活でよく、アレだけ戦えたよな。と思った。

それはともかくだ。・・・目の前の空腹の少女をどうにかしなければ・・・。そう思  
い、切り出す。

「フェイト、良ければさ・・・僕の家で食べていけないか？こう見えても料理得意なんだ」

「良いの？」

フェイトの問いに、僕は頷いた。

そして、僕は冷蔵庫にあつた野菜や豚肉を使って簡単な野菜炒めを作つてフェイトに  
振舞つた。

美味しい。といいながら、モキユモキユと、小動物な感じで食べるフェイトは凄く可  
愛かつたです。まる

○月○日晴れ。

「・・・って作文んんんんんんんんんんん!!？」

「ドラえもん、地の文にツッコむのはやめようよ」

—SIDE OUT

—アイアンクルセイド基地のとある一室。

「ドクター、エレクトロを回収しました」

「ご苦労であるベラ。メデイカルルームに放り込んでおしまい」

気絶したエレクトロを担いできた赤いハチマキを巻いた黒髪の女性、ベラにドクターと呼ばれた、緑色のアホ毛付きの首ほどまでの長さの髪を持つ、白衣の男。その背中には四本のマシンアームが装着されていた。

はっ。と答えると共に、ベラはエレクトロをメデイカルルームに運んでいく。

「ふうむ．．．まさかエレクトロとあるうものがこうもあっさりやられるとは．．．我々はこの世界の間人共．．．特にヒーローを侮りすぎてたようであるな」

ドクターの手元には、スパイダーマン、リリカルガールに関する資料．．．そして、アイアンマンを初めとする『アベンジャーズ』のヒーロー達に関する資料まであった。

「だが、今回の件でアベンジャーズの一人、アイアンマンに関するデータは取れた。これを使って、強靱ッ！無敵ッ！最強オオオオオオ!!なマシーンベムを作るのである！ふっはっはっはっは！これで、我輩のかわいい暴君童をぶっ壊したにつくきウエブヘッドを粉砕、玉砕、大喝さーい！ぬーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは!!」

そういいながら、高笑いをするドクター……、アイアンクルセイド最高幹部団『シニスター・シックス』の一人にしてアイアンクルセイド最高の頭脳を持つ『ドクター・オクトパス』

ドスッ!

「ドクター、五月蠅いです」

「ア、ハイ。すみません」

この後、……あまりのうるささにペラに眉間を矢で撃ち抜かれたのは言うまでもない。

TO BE COUTENUDE……。



## 第7話 『大波乱の科学コンテスト』

SIDE のび太

「ん・・・」

朝の日の光が顔に差し込むと同時に、僕は目を開ける。

「くう・・・くう・・・」

目を開ければ可愛らしい寝息を立てているフェイトが居た。結構、顔が近い。下手をすればキスしちやいそうなそんな距離・・・。

「うおわああああああああっ!!!?」

そんな僕はびっくり仰天して、布団から飛び起きた。目を開けたら、美少女の顔がキスする一歩手前まであったんだ。誰だつて驚く。

「んもく、五月蠅い。のび太」

「あ、アルフまで!?!何でここに!?!つてぶふお!?!」

いつもドラえもんが寝ている押入れが開き、アルフが全裸の上にパジャマの上着だけを羽織るといふなんとも目のやり場に困る格好で目を擦りながら僕に声をかける。その傍らには、しくしく泣いているドラえもんが・・・。

「しくしく……ミーちゃん……ノラミヤコさん……僕穢されちゃったよ……しくしく……」

……ドラえもん、君は一体何をされたんだ？

「何でって、アンタのパパさんに泊まっていいって言われたからここに居るんだけど？」

「……あー、そういえば、パパが泊めていいって言ってたっけ？」

アルフの言葉で、ようやく思いだす僕。そういえばそうだった。

あの後、パパが帰ってきて何故フェイトとアルフが居るのか？というのを話した。

とは言っても流石にジュエルシードのことや、それをめぐって戦っていた事は伏せておいた。言ったって信じないだろうし……、そして何よりもパパを巻き込むわけには行かない。

僕の所為で、パパが危険な目に逢う。そう考えただけでぞつとする。

つと、話が逸れてしまったね。かいつまんでパパに説明した後、パパはこういった。

「のび太。この2人、今晚泊めていきなさい」

そんなわけで、フェイトとアルフがここで寝ていると言う事だ。

「んにゅ……おはよう、のび太」

「あ、おはようフェイト」

昨日の事を思い出していると、フェイトが眠たそうな目を擦りながら僕に言う。結構

可愛いなあ……、思わず守ってあげたくなくなるほどの可愛さだ。……別に変な意味じゃない。いいね？

— 閑話休題。

「「「いただきまーす」」」

いつものように作った朝食を皆で食べる。フェイトとアルフも一緒だ。ちなみにパパは、すでに飯を食べ終えて会社に行っている。

「あ、この卵焼き美味しい」

「そう？喜んでもらえて嬉しいよ」

和気藹々な雰囲気。こんな事は久しぶりだった。ママが死んでからと言うものの、パパとドラえもん。そして僕だけで食卓を囲んでいたから。

久しく忘れていたこの光景。これが長く続けばいいと思っている。それが、1日だけであつても……。

「のび太？」

思考の海に浸っていると、フェイトが声をかけてきた。僕は、そんなフェイトに何でもないよ。と笑顔で答え朝食を食べたのだった。

— 飯を食べ終わって……。

「ん……？」

ふとカレンダーを見る。今日は日曜日、学校は休みだ。そして、今日の日付が書かれてある所に赤い丸。

「うくん……今日何があつたつけ……？」

「どうしたの？のび太」

「ん？いやあ、カレンダーの今日の日付に赤丸がしてあるんだけど、何があつたかなうって思つてね」

首を傾げる僕に、フェイトが問いかけてきたので答える。

—ピロリロリン♪

「ん？メールだ」

メールが鳴ったので、携帯を見てみるとジャイアンからだ。件名は『今日の待ち合わせ場所』とある。

『よお、のび太。今日は待ちに待った科学コンテストの日だな。いつもの空き地に皆で集合な。ちなみに時間は10時だ、遅れたらギツタンギツタンにするぞ』

「あー、今日科学コンテストの日だったんだ……。色々あつたから忘れてたよ……」

あちやー。と頭を掻きながら僕は時計を見る。時間は9時半。家を出ないと拙いな。

「ねえ、のび太。科学コンテストって何？私も見に行つていいかな？」

「うくん……」

フェイトの申し出に僕は考えた。・・・なのはちゃんもフェイトに昨日の件で面識はあるがジャイアン達には全然ない。フェイトの事をどう説明すればいいか分からないのだ。

本当の事を洗いざらい話せば、間違いなく皆を巻き込んでしまう。それは何としても避けたい。・・・だけれども・・・、

「ダメ・・・かな・・・？」

「む・・・」

涙目、上目遣いで僕を見るフェイト。・・・物凄く可愛い・・・。色々悩んだ結果、「いいよ。じゃあ、ドラえもん、アルフ。留守番宜しくね」

「分かったよ」

「OK。お二人さんごゆっくり♪」

「いってきまーす」

そう言つて、僕とフェイトは家を出たのだった。ジャイアン達に何ていおうかと考えながら。

—少年&少女移動中・・・。

「おーい、ジャイアン、スネ夫ー」

「おう、のび太。・・・って、何だその子!?結構可愛いじゃん!」

「のび太の癖に、可愛い女の子と一緒に何て生意気だぞ！その子彼女なのか？」

空き地に向かうと、ジャイアンとスネ夫が来ていたので、声をかけた。返ってきた返事は、まあ覚悟はしていた事だ。

「彼女って訳じゃないよ。昨日ちよつと色々あつてね、それで仲良くなつたんだ」

「フェイト・テスタロッサです（彼女かあ・・・はう・・・／／／）」

ジャイアンとスネ夫に自己紹介をするフェイト。何故か顔を赤らめているんだけど・・・一体どうしたんだろう？

「タケシさん、スネ夫さん、のび太さんおまたs・・・」

「ゴメンねー、遅くなっちゃた・・・つてあら？」

「あれ？フェイトちゃんも来てたんだ？」

「なのはちゃん知り合い？」

そこへ、しずかちゃん、アリサちゃん、しずかちゃん、なのはちゃんがやつてくる。ん？何か、しずかちゃんの様子が・・・。

「ねえ、のび太さん・・・その子誰？」

何か、『ゴゴゴゴゴゴゴ』と効果音が出そうな雰囲気僕に問いかけるしずかちゃん。・・・心なしか瞳に光が無いような気がする。

「落ち着いて、しずか先輩。フェイトちゃんとのび太先輩は昨日知り合ったばかりだか

「先輩が思うような間柄じゃないの」

「そんなしずかちゃんになのはちやんが説明する。．．．ナイスなのはちやん。」

「へえ、なのはちやんもこの子と知り合いなんだ」

「うん。そうだよ、スネ夫先輩」

「．．．ふうん、ならいいけど」

「しずかちゃんも納得してくれたようだ。．．．よかったよかった。」

「ひと悶着あつたけど、僕達は科学コンテスト会場へと向かうのであつた。」

「—科学コンテスト会場。」

「科学コンテスト会場についたぞ！」

「スネ夫、恥ずかしいから辞めようか」

「いや、何か言わなきやいけない気がして．．．」

「突如、電波なことをやりはじめたスネ夫にツツコミを入れる。会場の中は、色々な展示物がいっぱいある。」

「空飛ぶ車や、立体テレビ。全自動卵割り機など．．．、今はまだ試作の段階だけれど様々な展示物がいっぱいあつた。よっぽど珍しいんだろうフェイトも目を輝かせて展示品を見ている。」

「あれ？皆、どうしてここに？」

聞きなれた声でしたので皆がそのほうを振り向くと・・・、  
「出来杉? どうしてここに?」

出来杉だ。何故彼がここにいるのだろうか?

「うん。僕、科学コンテストに参加してるんだ」

「ええー!? お前が!?!」

「どういった物を作ってたのさ?」

驚いた表情で出来杉に問いかけるジャイアンとスネ夫。

「テレポート装置だよ、それを使って別世界に飛ぶ事が出来るんだ」

別世界にテレポートとは・・・随分すごい代物を作ってるナア、出来杉って・・・。

「テ、テレポート装置!?マジかよ!?!」

「と、言っても僕の父さんの勤めている研究所のバックアップがあるから僕ひとりで

作ったって訳じゃあないけど・・・」

「でも、スゲエよな。それがあればドラえもんの道具なんて要らないぜ」

それ、本人が聞いたなら泣くよ、ジャイアン。

—ちよびつとSIDE OUTしてのび太宅。

「ヴェックシ!?!」

「どうしたんだい? ドラえもん」



「ん、ちよつとね。風邪かなあ・・・?」

「ふーん・・・」

ドラ焼きを食べている最中、くしやみをする猫型ロボットが居たそうナ。

ーんでSIDEをのび太に戻す。

「へえ、これが『異次元テレポート装置』かよ」

「うん、僕が作ったんだ」

今、僕達は出来杉の案内の元、彼が作ったテレポート装置が置いてあるブースに足を運んだ。その装置は円形型で小さな宇宙船のような形をしていた。

これで別世界に行けるのかあ・・・、何て考えていると。

「んじゃあさ、これを使って行ってみようよ異次元の世界!」

スネ夫がそんな事を言い出した。それを皮ぎりに、皆も行きたいと言い出した。どこどこで残念なニュースが・・・、

「ごめんね、この装置は4人までしか乗れないんだ。だから誰が乗るのかジャンケンで決めようよ」

どうやら人数に限りがあるらしい。成る程、ジャンケンならば、後腐れがないな。「それじゃあ行くよ・・・ジャンケンケン・・・」

「」「」「」「ポント」

「それじゃあ、俺達は行って来るぜ〜」

「写真撮って見せるから楽しみに待っててよ〜」

「ごめんね、のび太さん」

「それじゃあ出発するよ。スイッチオン!」

ジャンケンをした結果、勝ち残った4人はジャイアン、スネ夫、しずかちゃん、出来杉の四人だ。

皆が見守る中、出来杉が装置内にあるボタンを押すと同時に、装置が眩い光を放ち、消えていった。

「一体、どんな景色を見てくるんだろうなあ・・・」

異次元へと行った、ジャイアン達を思いながら呟く。そのときだった。

— D O M !!!

「ツ!?!何だ!?!」

突如、響き渡った爆音。そして、

「う、うわああああああああ! 怪人だああああああああ!!!」

「に、逃げろおおおおおおお!!!」

悲鳴と共に逃げ惑う人々。怪人・・・、その言葉にハッと気づく。

まさか、アイアンクルセイドの仕業か!?だとすれば・・・、僕はなのはちゃん、フエ

イトと顔を見合わせる。

『フェイトは、皆を避難させて。僕となのはちやんはアイアンクルセイドの連中を食い止める!』

『分かった、気をつけてね。なのは、のび太!』

—ダッ!

「あつ!ちよつとのび太先輩!なのは!?!」

念話で、フェイトにそう言うと、僕となのはちやんはアイアンクルセイドの連中がいるであろう場所へと走る。

さあ、ここからはスパイダーマン&リリカルガールのダイナミックデュオの定番だ!

T o b e C o u n t e n u d e . . .